



平成 29 年度

高等学校における
アクティブ・ラーニングを教育内容と
関連づけた授業の開発に関する調査研究
成果報告書

(平成 28・29 年度全国教育研究所連盟課題研究)

平成 30 年 3 月
大阪府教育センター

目 次

I	研究の背景と概要	1
	(1) 高等学校の課題	
	(2) 課題解決に向けた取組み	
	(3) 成果と課題(今後に向けて)	
II	研究課題の意義・目的	3
III	研究体制	4
	(1) 研究体制	
	(2) 実践協力校	
IV	研究内容	5
	(1) 主体的・対話的で深い学びを具現化した授業実践事例の提示と教員の授業力向上	
	①基本的な考え方～主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の実現に向けて～	
	②Web コンテンツ「動画で見る府立高校の授業」	
	③Web コンテンツ「動画で見る府立高校の授業」の特徴	
	④Web コンテンツ「動画で見る府立高校の授業」の具体例(国語科の授業)	
	⑤「動画で見る府立高校の授業」の研修への活用	
	⑥研究成果の検証方法	
	(2) 教科横断的な授業改善を目的とした校内研修組織の構築と組織的な校内研修の推進	
	①「パッケージ研修支援」とは	
	②「授業改善に関するカリキュラム・マネジメントリーダー研修」とパッケージ研修の連動	
	③「授業改善に関するカリキュラム・マネジメントリーダー研修」の改善	
	④研究成果の検証方法	
V	研究の成果	14
	(1) 主体的・対話的で深い学びを具現化した授業実践事例の提示と教員の授業力向上	
	①10年経験者研修受講者の授業改善に関する理解と意欲の向上	
	②10年経験者研修受講者の課題 (「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の指導と評価)	
	(2) 教科横断的な授業改善を目的とした校内研修組織の構築と組織的な校内研修の推進	
	①リーダー研修受講者の「目的合致度」「内容理解度」「個人活用度」「内容充実度」が上昇	
	②組織的な授業改善に取り組んだ学校の学校教育自己診断アンケートの結果上昇	
	(3) 研究成果物の作成	
	①「高等学校における校内授業実践研究進め方ガイドブック」	
	②リーダー研修成果報告書	
VI	今後の展望	21

I 研究の背景と概要

(1) 高等学校の課題

学習指導要領改訂や高大接続改革の議論の中、「アクティブ・ラーニング」、「資質・能力」、「見方・考え方」、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」など、高等学校においても様々な新しい用語が飛び交うようになった。新学習指導要領が実施される前にもかかわらず、意欲的な教員が、「アクティブ・ラーニング」を意識した様々な授業実践を行っている。

しかし、それらの授業実践が教員個人レベルに留まりがちであること、個々の教員の「アクティブ・ラーニング」の意味や目的の捉え方も様々であること、授業改善の必要性を自覚し「アクティブ・ラーニング」を意識した授業に取り組んでみたいと思っているが、何から始めてよいかかわらず前へ進めない教員も多いことがわかった。(平成 28・29 年度 10 年経験者研修「授業づくり」実践レポートの「所属校で主流になっている授業スタイルとその長所、短所」より)

また、各種の中央教育審議会答申で指摘されているように、高等学校においては、小・中学校に比べて「教師が何を教えるか」という観点で授業を組み立て、知識伝達型の授業に留まる傾向がある。学力の 3 要素を踏まえた指導と観点別学習状況評価が教員に浸透しておらず、日々の授業が生徒の卒業後の学習や社会生活に必要な力の育成につながりにくい現状がある。

(2) 課題解決に向けた取組み

上記の課題を解決するために、本調査研究では「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」と「教科を横断した授業改善・カリキュラム・マネジメント」を連動して取り組み、教員一人ひとりの授業力と学校の授業力の向上を図り、生徒の資質・能力の育成につなげることにした(図 1)。

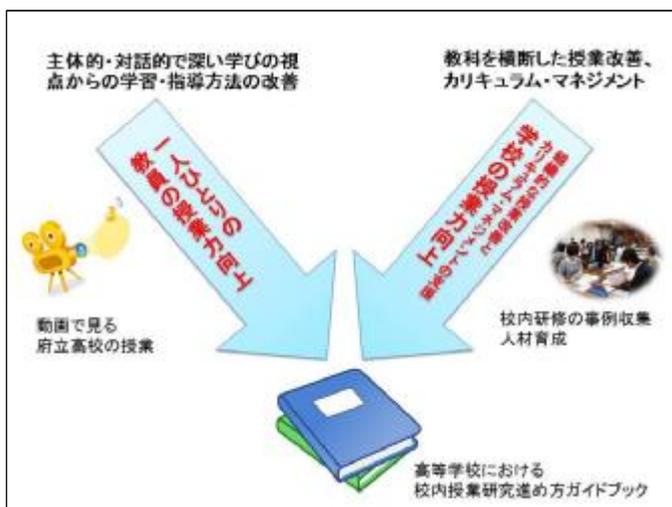


図 1 調査研究全体のイメージ

「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」では、実践協力校とともに各教科の主体的・対話的で深い学びを追究した授業実践をまとめ、ビデオコンテンツ「動画でみる府立高校の授業」を作成した。平成 29 年度の法定研修の授業づくり講座でこのコンテンツを活用して講義・演習を行い、教員に授業改善の方向性について具体的なイメージをもたせた。また、授業実践交流を教科別と教科混合別の 2 回に分けて行い、授業者に自身の授業を俯瞰的に捉え省察させるようにした。

「教科を横断した授業改善・カリキュラム・マネジメント」では、平成 28 年から、主体的・対話的で深い学びの実現をめざした組織的な授業改善をサポートする学校支援(以下、パッケージ研修支援-P. 12 参照)と当該校の研修主担者を育成・支援する研修(「授業改善に関するカリキュラム・マネジメントリーダー研修」。以下、リーダー研修)を連動させて実施し、研修主担者は各校の 1 年間の取組みを成果報告書としてまとめた。平成 29 年度のリーダー研修では、「動画で見る府立高校」を用いたり、平成 28 年度の成果報告書の中から好事例を配付したりして研修を実施し、研修主担者が学校全体で取り組む「主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善」の進め方について具体的なイメージをもてるようにした。

平成 30 年度末に、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりと校内授業研究の進め方をまとめた「高等学校における校内授業実践研究進め方ガイドブック」を作成し、配付する。

(3) 成果と課題（今後に向けて）

○「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」

- 「動画で見る府立高校の授業」を活用したり、教科別と教科混合を組み合わせて実践交流を行ったりしたことにより、平成 29 年度 10 年経験者研修(ユニット研修)の受講者アンケートの結果（平均値）が上昇した。

「動画で見る府立高校の授業」や研修デザインの工夫により、受講者の授業改善に関する理解が深まった。しかし、事例数が不足している。次年度以降も、府内の授業実践例を収集し、掲載事例を増やしていく。(P.14)

- 10 年経験者研修受講者は主体的・対話的で深い学びをめざした授業実践において、「目標の提示」、「生徒が興味を持つ学習課題の設定」、「適切な言語活動の設定」、「安心感をもって学べる教室環境・人間関係の構築」は比較的できたと自己評価している。しかし、「授業で学んだことが生徒の日常生活や社会生活への活用につながったり、次の学びへとつながった」という手応えは持っていない。

(平成 29 年度 10 年経験者研修の実践レポートのアンケート結果-P.15、16)

受講者は「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に関わる部分への課題を自覚している。いずれも目標設定を明確にし、単元の学習を積み上げて、長期的に育成していく資質・能力である。次年度の研修はこの 2 つの資質・能力の育成と評価方法に重点を置いて取り組んでいく。

○「教科を横断した授業改善・カリキュラム・マネジメント」

- 平成 28 年と平成 29 年度のリーダー研修のアンケート結果の比較により、受講者アンケートの結果（平均値）が上昇した。平成 29 年度の研修の中で「動画で見る府立高校の授業」やリーダーの実践など具体的な取り組み例や方法を多く取り上げたことが功を奏したと推察される。(P.16)

- 平成 28 年度と平成 29 年度の学校教育自己診断結果が入手できた府立高校のうち、平成 29 年度にパッケージ研修支援に取り組んだ学校（5 校）と平成 24 年度以降にパッケージ研修支援を行ったことがない学校（5 校）を抽出し、授業に関する質問項目を比較した。(P.18)

生徒アンケート・教職員アンケートともに、パッケージ研修支援に取り組んだ学校の肯定的な回答率の上昇が大きい。組織的な授業改善に取り組むことで、教員一人ひとりの授業づくりへの意識の向上と協働する風土が醸成されること、これと相似形で生徒の学ぶ意欲が高まることが明らかになった。

高等学校の多様性を踏まえ、次年度以降も継続して校内研修の進め方に関する各校の様々な工夫を収集しパッケージ研修支援やリーダー研修で紹介していく。また、教育センターとして、リーダー同士が日常的に相談し合ったり、情報共有し学び合えるようなネットワークづくりを支援する仕組みの構築が必要であると考えている。

Ⅱ 研究課題の意義・目的

新学習指導要領の趣旨の実現に向けて、中央教育審議会がとりまとめた「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）【概要】」（平成28年12月）では次のように示されている。

2. 学習指導要領等の実施に必要な諸条件の整備 （教員の資質・能力の向上）

- これからの教員には、学級経営や児童生徒理解等に必要な力に加え、教科等を越えた「カリキュラム・マネジメント」の実現や「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善や教材研究、学習評価の改善・充実などに必要な力が求められる。教科等の枠を越えた校内の研修体制の一層の充実を図り、学校教育目標や育成をめざす資質・能力を踏まえ、「何のために」「どのような改善をしようとしているのか」を教員間で共有しながら、学校組織全体としての指導力の向上を図っていけるようにすることが重要である。

上記を踏まえて、本調査研究では、ビデオコンテンツ「動画で見る府立高校の授業」の作成と法定研修の工夫により、各教科等における主体的・対話的で深い学びの視点を具現化した授業実践を提示し、教員一人ひとりの授業力向上を図る。また、パッケージ研修支援とリーダー研修を関連づけた組織的な授業改善を支援する体制を構築するとともに、校内研修の好事例を収集し成果物「高等学校における校内授業実践研究進め方ガイドブック」としてまとめ発信し、学校全体の授業力向上を図る。

授業改善や校内研修等の実践事例について、先進事例等を動画も含めて参照できるようなコンテンツやガイドブック等を作成し、教育委員会が学校に対して教科等を横断した教育課程全体の改善について助言できる体制を整えていくことの意義は大きい。

Ⅲ 研究体制

(1) 研究体制

	氏名	所属・職名	役割分担の内容
研究代表者	柳田 典昭	大阪府教育センター カリキュラム開発部 高等学校教育推進室 室長	研究全体の統括
研究分担者	石井 英真	京都大学大学院教育学研究科 准教授	研究全体に対する指導助言
	岡本 真澄	大阪府教育センター カリキュラム開発部 高等学校教育推進室 主任指導主事	研究全体の企画・立案、実施、 とりまとめ 授業改善に関するカリキュラム・マネ ジメントリーダー養成研修統括
	広瀬 祐司	大阪府教育センター カリキュラム開発部 高等学校教育推進室 主任指導主事	パッケージ研修支援Ⅱのとりまとめ
	杉田 真規子	大阪府教育センター カリキュラム開発部 高等学校教育推進室 主任指導主事	実践事例の収集及び Web アップ
	堀内 貴臣	大阪府教育センター カリキュラム開発部 高等学校教育推進室 指導主事	会計・事務

(2) 実践協力校

① 授業実践事例

教科・科目等	学校名
国語	府立枚方津田高等学校
地歴・公民	府立大正高等学校
数学	府立芦間高等学校
理科	府立豊中高等学校
保健体育	府立長野高等学校
芸術(音楽)	府立夕陽丘高等学校
芸術(美術)	府立枚岡樟風高等学校
外国語	府立池田高等学校、府立富田林高等学校
家庭	府立芥川高等学校
情報	府立東百舌鳥高等学校

② 組織的な授業改善

年度	学校数
平成 28 年度	25 校(全日制 21 校、定時制 4 校)
平成 29 年度	10 校(全日制 9 校、定時制 1 校)

IV 研究内容

(1) 主体的・対話的で深い学びを具現化した授業実践事例の提示と教員の授業力向上

①基本的な考え方～主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の実現に向けて～

調査研究を進めるにあたり、教育センターとして国の動向を踏まえて、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の基本的な考え方を整理し、指導主事で共有した。ポイントは次の5つである。

- a) まず、育てる資質・能力(付きたい力)を明確にする
- b) 資質・能力を育成するに値する教科の内容について吟味する
- c) 生徒が主体となり、対話を通じた学びが促進できるような学習活動を取り入れ、教科の内容と付きたい力をつなぐ
- d) 学習を通して生徒は何を身に付けることができたのかを把握する評価方法を予め考える
- e) 生徒が学ぶ姿、生徒の思考の流れ(生徒はどのように学ぶのか)をイメージし、その姿を引き出すために指導者の果たす役割は何かを考える

整理した内容は、当センターの Web ページに掲載している。(図 2・3)

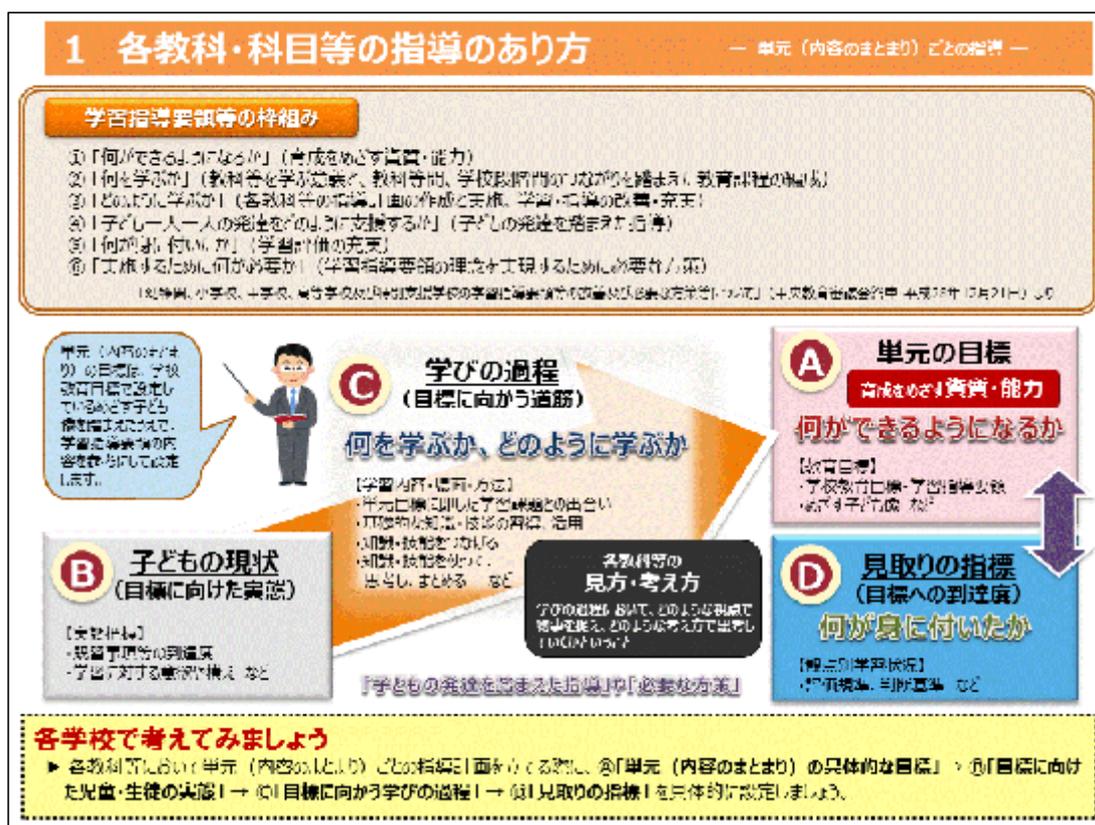


図 2 単元を見通して資質・能力を育成する授業

出典 大阪府教育センターWeb ページ「次期学習指導要領を読み解く Key Word」

(http://www.osaka-c.ed.jp/matters/curriculum/curri_no_1/curriculum2.html)

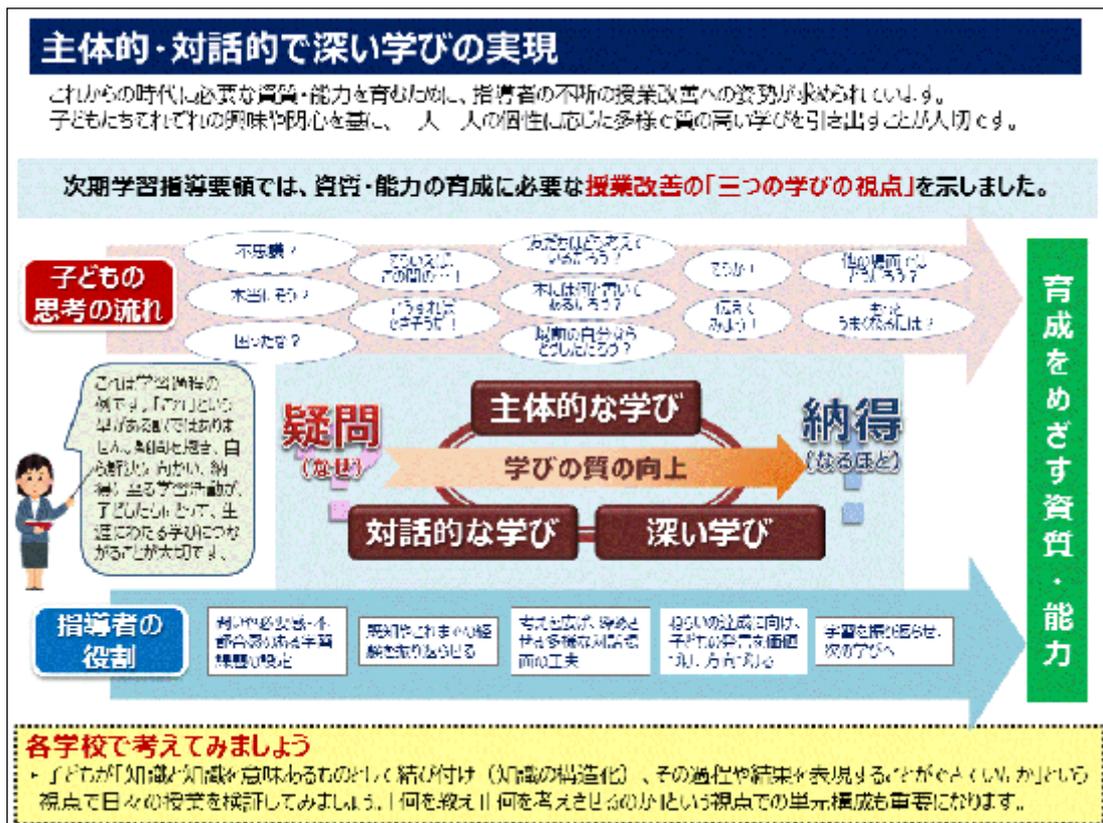


図3 主体的・対話的で深い学びの実現

出典 大阪府教育センターWeb ページ「次期学習指導要領を読み解く Key Word」

(http://www.osaka-c.ed.jp/matters/curriculum/curri_no_1/curriculum2.html)

②Web コンテンツ「動画で見る府立高校の授業」

3【展開1 決勝戦での出来事(推察)】小説を読み「ナイン」
 府立秋田高等学校【高等学校・国語】平成29年1月

本時の主な流れ

- 導入(本時の課題目標を明示する)
- 発問
- 展開1(決戦直前の推察)
 - 展開1(決戦直前の出来事について)
 - 話し合いを促す
 - 個人発表→グループでの意見交換
 - 話し合いを促す
 - 展開1(決戦直前の出来事)
 - 展開1(決戦直前の出来事)
 - 話し合いを促す
 - 個人発表
 - 話し合いを促す
 - 展開1(決戦直前の出来事)
 - 話し合いを促す
 - 個人発表
 - 話し合いを促す
 - 展開1(決戦直前の出来事)
 - 話し合いを促す
 - 個人発表
 - 話し合いを促す

実践の概要

この実践は、「読む能力」の育成を目的として、個人及びグループで、本文に出てくる登場人物(「だから…」)に注目して話し合いを行うことにより、登場人物である「奥村」の心情を理解する学習内容で構成され、それらの活動を通して物語の主題に関する考察を深める授業である。本授業は全7時間で構成される単元のうち第8時である。

秋田県立高等学校では、生徒一人ひとりが自律を持って学習能力の定着と活用能力の獲得を目標として授業に取り組んでいる。生徒たちは豊富な経験や、得意な学習方法に頼りすぎず、多様な学習方法を試みる。授業内容や学習方法の共有、主体的な学習活動の展開による学習能力の向上、このように生徒たちが自律して「読む能力」を育成する実践である。

図4 動画で見る府立高校の授業

「主体的・対話的で深い学び」の授業イメージをもてるように、動画コンテンツ「動画で見る府立高校の授業」を作成した。(図4)

平成28年度は、5教科6事例、平成29年度は新たに4教科5事例をWebアップした。(平成30年3月末9教科11事例を掲載)

出典 大阪府教育センターWeb ページ
http://www.osaka-c.ed.jp/category/forteacher/teachers_1.html

※視聴にはパスワードが必要

③Web コンテンツ「動画で見る府立高校の授業」の特徴

コンテンツに掲載する授業は、各教科担当指導主事が推薦・依頼した授業者と協働で指導案検討を行い、一緒に作りあげた。撮影した授業動画は、生徒の学ぶ姿「主体的に学ぶ姿」、「対話的に学ぶ姿」、「深く学ぶ姿」とともに、それらを引き出した授業者の発問・指示、説明が現れる場面を切り取り、ポイントをテロップとして挿入し編集した。しかし、動画のみではどうしても視覚で把握しやすい姿のみが強調されがちになる。この弱点を補うものとして、指導案、思考の様子がわかる課題やワークシートの生徒の記述、授業者の省察をまとめた指導資料を作成し、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学びの実現）が単なる指導法の工夫のみという印象にならないようにしている。

④Web コンテンツ「動画で見る府立高校の授業」の具体例(国語科の授業)

「動画で見る府立高校の授業」には、動画に加え、単元の指導計画や評価規準、本時の目標等の実践の概要に加えて、主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた授業の工夫等について掲載している。

例えば、国語科では、以下のような授業を取り上げている。

ア 単元の概要

教 科：国語「現代文B」

単 元 名：小説を読む 『ナイン』

単元目標：

- ・文章に描かれた人物、情景、心情などの書き手の意図を捉え、自分の考えを作品にある文体や語句を工夫し、書こうとしている。(関心・意欲・態度)
- ・文章に描かれた人物、情景、心情などの書き手の意図を捉え、自分の考えを作品にある文体や語句を工夫し、書くことができる。(読む能力)
- ・文や文章の組み立て、語句の意味などを理解し、語彙を豊かにしている。(知識・理解)

時	主たる学習内容	評価
第1時	・作者と作品に関する知識を学ぶ。 ・作品における「今」と「かつて」が具体的にいつ頃かを確認し、文章の組み立てを理解する。	・定期考査 【知識・理解】 ・記述の点検 【読む能力】
第2時	・「新道少年野球団」の強さについて確認し、「新道」の過去と現在とを対比的に整理し、情景描写が物語に与える効果について理解する。	・記述の点検 ・机間指導 ・観察 【読む能力】
第3時	・「ナイン」の現況を理解し、それを伝える「中村さん」の心情や「正太郎」に関して口を閉ざす理由について考え、登場人物の心情を捉える手がかりを探す。	・記述の点検 ・机間指導 ・観察 【読む能力】

第4時	・「中村さん」の会話を通して、「正太郎」像を読み取る。	・記述の点検 【読む能力】
第5時	・「英夫」の会話を通して、「正太郎」像を読み取る。	・記述の点検 【読む能力】
第6時 (本時)	・言いさし部分に含まれた「英夫」の心情を、これまでの会話から読み取れる「正太郎」像を基に個人でまとめ、グループで協議したものを発表する。 ・作品の主題について、文章に描かれた人物の心情推察を基に自分の考えをまとめる。	・ワークプリントの点検 ・机間指導 【読む能力、 関心・意欲・態度】
第7時	・野球場を見ている「わたし」の心情について考え、作品の主題との関連を読み取り、前時までの振り返りを行う。	・記述の点検 【読む能力】

イ 本時の主な目標

- ・積極的に登場人物の心情をワークシートに書き、グループメンバーと意見を交流しようとする。
(関心・意欲・態度) …評価方法＝行動の観察
- ・文章に描かれた人物、情景、心情などの書き手の意図を捉え、自分の考えを作品にある文体や語句を工夫し、書くことができる。
(読む能力) …評価方法＝記述の点検

ウ 本時の主な流れ(50分)

時間	学習活動	指導上の留意点	評価
A 導入 5分	1 第五段落(「～ベンチに戻ってぐったりして」まで)を音読する。 2 本時の目標を確認する。	・グループ間で音読するように伝える。 ・課題内容を板書する。	
B 展開1 10分	3 決勝戦での出来事(音読した箇所以降はどのような内容になるのか)を推察する。 4 本文を読んで出来事を確認する。	・個人で推察させた後に、グループでも話し合わせる。 ・授業者によるポイント箇所の指摘を行う。	
C 展開2 20分 課題①	5 「だから…」に続くかたちで英夫の言葉を考え、個人でワークシートに書く。 6 グループで意見交換を行い、ホワイトボードに「だから…」以降の英夫の言葉を書く。	・ホワイトボードを各グループに渡し、それに省略部分を書くよう指示する。 ・発表係の生徒がホワイトボード	・話の流れから「英夫」の心情を考察できる。 (読む能力) ・積極的にグループ内で意見を出そうとしている。 (関心・意欲・態度)

	7 ホワイトボードに書いた英夫の言葉を全体に発表する。 8 展開1及び展開2の振り返りとまとめを行う。	を持ち、前に出てくるように指示する。 ・発表を聞き、ワークシート記入内容について変更してもよいと伝える。	・文章の形態や文体、語句などを工夫し、登場人物の心情をまとめることができる。 (読む能力)
D 展開3 10分 課題②	9 物語の主題とそう考えた理由について、個人で考えてワークシートに記入する。 10 9についてグループで意見交換する。	・発表内容を参考にさせて、物語の主題は何かを問いかける。 ・書くことが難しい生徒には個別で対応する。	・他のグループの発表を踏まえ、物語の主題を考えることができる。 (読む能力)
E 次時の予告 5分		・本時の内容(ワークシートの内容)が次時につながることを伝える。	

エ 本実践での学びの特徴

この「読む能力」を育成するための実践を「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点から見た場合、次のような特徴がある。

主体的な学び

生徒が興味を抱きながら課題を自分事としてとらえて学習することができるように。テキスト展開を自分の経験に照らし合わせて推察させたり、「英夫」のような感情移入しやすい登場人物の心情を深く考えさせたりしている。

対話的な学び

生徒が多用な考え方を知り思考を広げるためにグループで協議を行い、全体に発表して互いの意見を交流する場面を設けている。特にグループでの話し合いは展開1、2、3のそれぞれで計3回行われている。また、テキストの展開推察は作者との、言いさし部分の考察は登場人物との対話的な活動になっている。

深い学び

本実践では登場人物の心情に関わる言動や出来事の描写をとりあげて、理解と表現の活動を行っている。それにより、学習者が自分自身の他者との関係性についても思いや考えを広げ深める学習になっている。このような「言葉による見方・考え方」を働かせた言葉の学習を経験させることによって、生きていくうえで邂逅するであろう様々な人間関係等の中で、他者と共感しあい、理解しあうことが大切な状況で必要とされる資質や能力を育てることに結びついている。

⑤「動画で見る府立高校の授業」の研修への活用

10年経験者研修とアドバンスセミナーD(5～9年目対象)^{*1}の「主体的・対話的で深い学びの実現」をテーマにしたユニット研修^{*2}で「動画で見る府立高校の授業」を活用した。

ユニット研修は、テーマについての理論を学ぶ理論回、学んだことを所属校で実践し、成果と課題を実践レポートにまとめる実践回、実践をレポートを持ち寄り、交流し振り返る検証回という一連の流れで行う。理論回の講義や演習で「動画で見る府立高校の授業」を使用するとともに、自分の教科以外の授業実践を視聴することで「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた多様なアプローチが学べることを話し、所属校や自宅等での視聴を促した。

ユニット研修・理論回の流れは次のとおりである。

- 1 「動画の視聴」…生徒の思考の流れ—教員が果たしている役割をメモ
- 2 指導案を用いながら主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業のポイントを解説
- 3 自校での実践に向けて授業計画を立案、交流
- 4 アドレスとパスワードを示し、学校・自宅などで他教科も含めての視聴を促す

検証回では、事前課題として実践レポートを課した。研修は、自分の教科で行う実践交流Ⅰ(グループ)、教科混合行う実践交流Ⅱ(グループ)、実践交流Ⅰ・Ⅱを踏まえて各自で授業づくりチェックシートを作成する(個人)という流れで実施した。

実践交流Ⅰでは、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」や「学習過程」を理解し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習・指導方法の改善・充実の方策について考察する。続く実践交流Ⅱでは、教科混合のグループになり、実践交流Ⅰでまとめた自分の教科における主体的・対話的で深い学びについて、他の教科の教員に説明させる。自分の教科を俯瞰的な視点で省察させるねらいがある。

最後の授業づくりチェックシート作りでは、今後自分の授業づくりの際に用いるものとして、主体的・対話的で深い学びを実現させるためのポイントを各自にまとめさせている。一連の研修プロセスによって、生徒の学びの過程を質的に高めていく幅広い授業改善の工夫を主体的・対話的に学びとり、受講者自身がより豊かな授業観を身に付けることをねらいとしている。

⑥研究成果の検証方法

平成28年度と平成29年度の10年経験者研修のユニット研修のアンケート結果を比較し、各教科等における主体的・対話的で深い学びの視点を具現化した授業実践を提示することで、授業改善に関する教員の理解度が高まり、授業力向上に資することができたどうかを検証した。

また、検証回のアンケートで実施した2つの質問項目の自由記述を分析し、主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた授業を行う教員が初期に獲得する知識・技能は何かを明らかにするとともに、受講者がよりよい授業実践に結び付けていくために今後センター研修に取り入れなければならない内容を検証した。

- ※1 アドバンスセミナーとは、教職経験5年目から9年目の教諭を対象とした、教育公務員特例法第24条「中堅教諭等資質能力向上研修」に相当する研修である。個々の教諭の能力、適性等に応じて必要な事項として、A(ロジカルシンキング)、B(メンタリング)、C(チームビルディング)、D(授業改善)の4種類を開講している。
- ※2 当センターでは、理論回・実践回・検証回の3回を1つのまとまり(ユニット)として実施する研修のことをユニット研修と呼んでいる。理論回では研修テーマに沿った基礎的な知識・考え方を学ぶ。実践回では理論回で学んだ内容を所属校で実践し、「実践レポート」にまとめる。検証回では「実践レポート」を持ち寄り、互いの成果や課題を交流したり、新たな視点を学んだりすることで、取組みの改善・定着を図る。センター研修と所属校の実践を往還させることで、教員の指導力向上に結びつける意図がある。

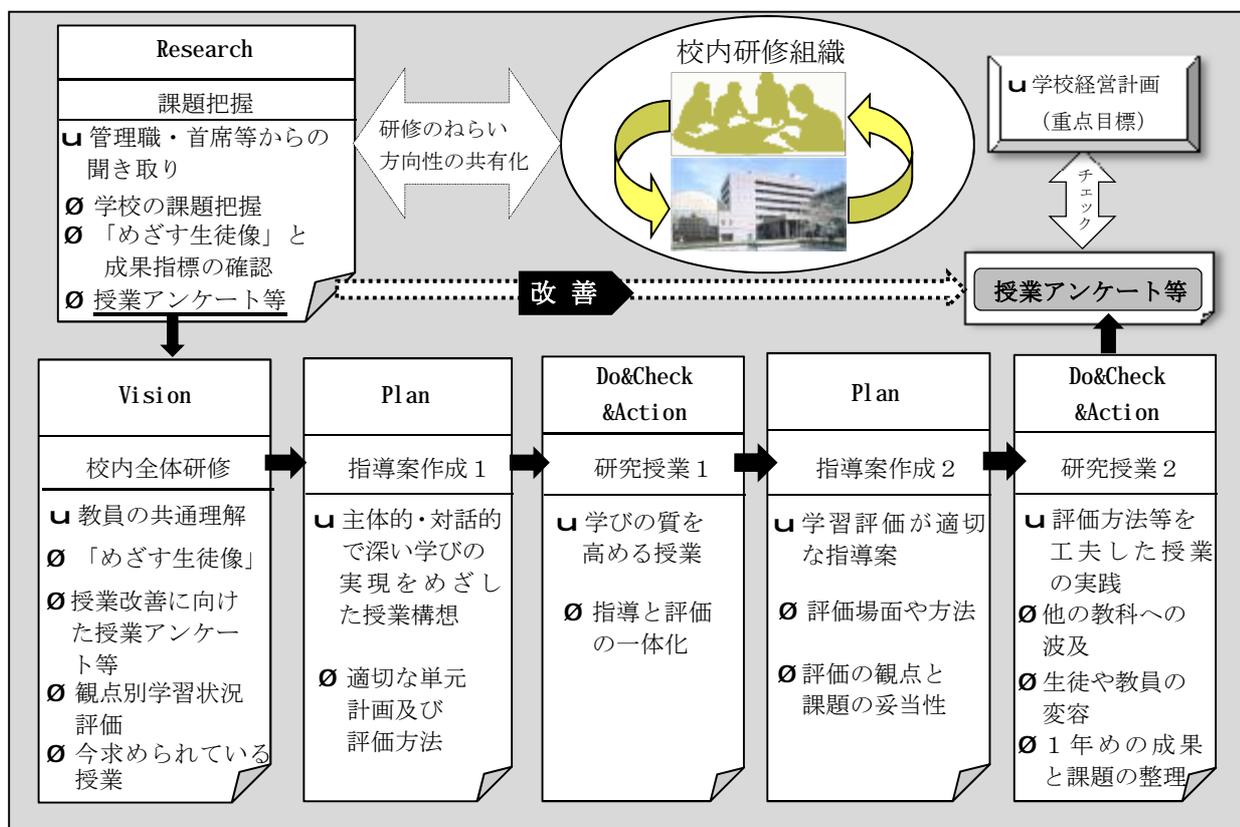
(2) 教科横断的な授業改善を目的とした校内研修組織の構築と組織的な校内研修の推進

① 「パッケージ研修支援」とは

当センターでは、平成 24 年度から校長のリーダーシップのもと、教員全体の授業力を向上させるための学校の組織的取組みへの支援として、「パッケージ研修支援」を始めた。平成 27 年度からは、「主体的・対話的で深い学び」の実現とその学びにより身に付いた力の評価の方法を課題にあげ、全教科における PDCA サイクルに基づく授業改善の支援を継続的に行っている。パッケージ研修支援に申し込んだエントリー校は校内研修や研究授業・研究協議の実施にあたり指導主事の定期的な関わりを受けることができ、年間を通じてタイムマネジメントがしやすくなる。(図 5)

② 「授業改善に関するカリキュラム・マネジメントリーダー研修」とパッケージ研修の連動

平成 28 年度からは、より多くの府立高校で組織的な授業改善が進むように、校内研修を推進するリーダーを育成することを目的として「授業改善に関するカリキュラム・マネジメントリーダー研修」(以下、リーダー研修)を新設した。リーダー研修はパッケージ研修支援の節目ごとに研修を実施している。(図 6) 第 2 回の研修で互いの校内研修年間計画について情報交換を行い、その後は中間報告会や成果報告会で各校の取組み内容を交流する活動や参加型ワークショップの手法を取り入れるなど、講義のみに留まらない実践的な研修内容としており、研修受講者が各校のリーダーとして校内研修を円滑に進められるようにしている。



※ 代表教科による研究授業(2回)を中心にして、教科を超えてめざす授業像を共有する

図5 パッケージ研修支援の流れ

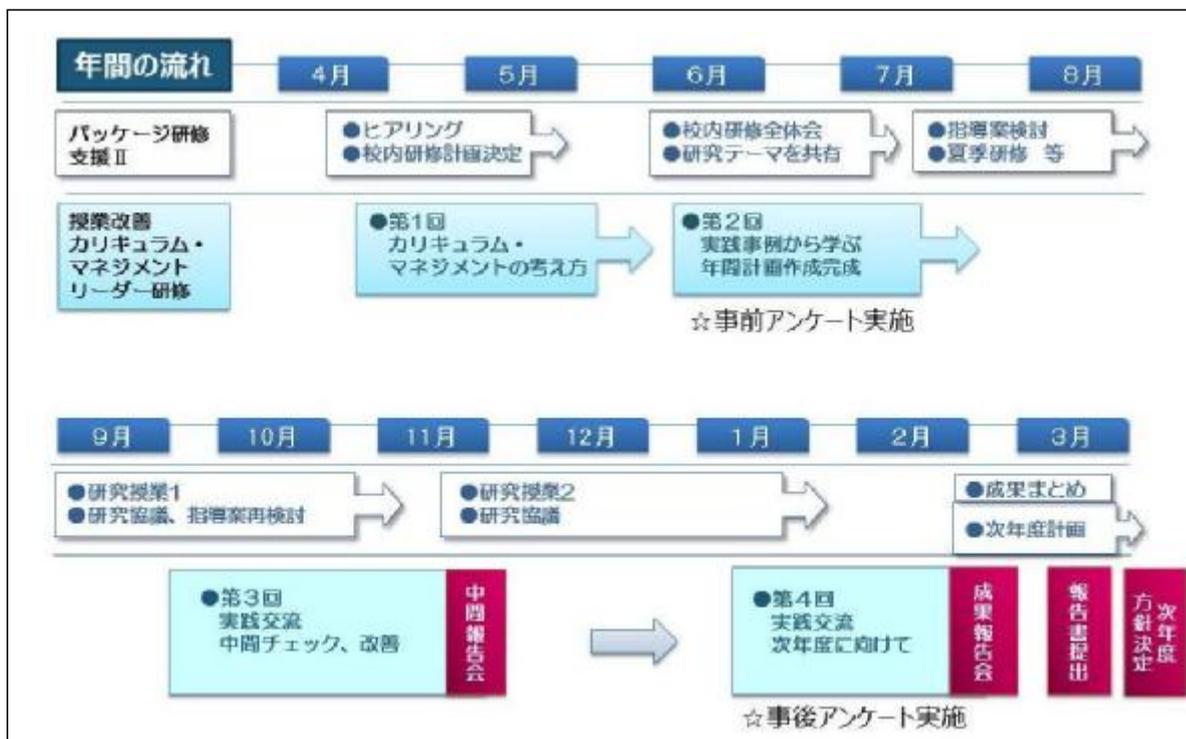


図6 授業改善に関するカリキュラム・マネジメントリーダー研修とパッケージ研修支援の連動

③「授業改善に関するカリキュラム・マネジメントリーダー研修」の改善

平成28年度の研修を通じて、「目標が揃わない」「理解者や参加者を増やすには」「時間不足」などリーダーが抱える学校の課題を把握し、実践協力校が各校の実情に応じて行っている工夫を集約した。平成29年度のリーダー研修ではこれらの工夫や好事例を紹介し、リーダーが自校の課題を解決する方策を考えるヒントを得て校内研修を進めやすくなるように支援した。

④研究成果の検証方法

平成29年度に組織的な授業改善支援を行った10校について、平成28年度（授業改善に取り組む前）と平成29年度（授業改善取り組み後）の学校教育自己診断の結果を比較分析し、主体的・対話的で深い学びの実現を中心に据えた授業改善を推進することが、個々の教員の授業向上と学校全体の授業力の向上、生徒の学力の向上につながることを検証した。

抽出した質問項目例を示す。（表1）

生徒アンケート	わかりやすく楽しい授業が多い
	授業では、実験・観察・実習などの時間がたくさんある
	授業で、自分の考えをまとめたり、発表することがよくある
	授業で、グループ（班）で活動することがよくある
	教え方に様々な工夫をしている先生が多い
教職員アンケート	各教科において、教材の精選・工夫を行っている
	本校の教育活動について、教職員で日常的に話し合っている
	学習指導の方法や内容について、他の教科の担当者と話し合う機会がある

表1 学校教育自己診断から抽出した質問項目

V 研究の成果

(1) 主体的・対話的で深い学びを具現化した授業実践事例の提示と教員の授業力向上

①10年経験者研修受講者の授業改善に関する理解と意欲の向上

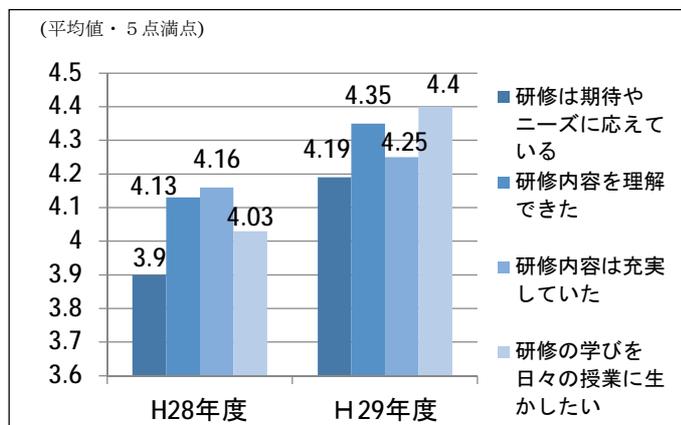


図7 10年経験者研修「主体的・対話的で深い学び」ユニット研修アンケート (H28-29年度の比較)

10年経験者研修のユニット研修の中で、授業実践のビデオコンテンツ「動画で府立高校の授業」を用いて授業の在り方について考える機会を設けた(理論回)。その後、受講者は所属校で授業の創意工夫に努め、計画的に授業を実践し(実践回)、成果と課題をまとめた実践レポートを持ち寄り行った実践交流(検証回)を行った。(p10参照)このような情報交換を行うことで、研修アンケートの4つの項目の数値が上昇した。(図7)

アンケートの自由記述からは、受講者は主体的・対話的で深い学びに実現に向けて、「明確な目標設定と提示」「適切な課題設定とその準備(授業研究の重要性)」「教室の雰囲気づくり(人間関係の構築)」「自教科・他教科の交流で自覚的に授業を振り返る機会の必要性」について学んでいることがわかった。

また、受講者は今後に向けてもっと知りたいこと・学びたいこととして、「さらに多くの授業実践例を知りたい」「実際の授業を見たい」「評価方法」を挙げている。「動画で見る府立高校の授業」は、平成30年3月末に9教科11事例(国語1、地歴・公民1、数学1、理科1、保健体育1、芸術2、外国語2、家庭1、情報1)の掲載を予定している。外国語(英語)を除き各教科・科目1事例ずつと数が少ない。今後さらに掲載事例を増やす必要があると考えている。

図7の結果とアンケートの自由記述から、「研修の学びを日々の授業に生かしたい」という個人活用度の数値上昇の要因は次の3つであると推察している。

- 1 「動画で見る府立高校の授業」視聴により、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善のイメージを具体的に持ち、ねらいをもって授業実践に取り組めた。
- 2 検証回で自らのねらいや授業構想に基づいて省察できた。
- 3 「教科別討議(グループ)」→「教科混合討議(グループ)」→「各自で授業づくりチェックシート(図8)作成(個人)」という主体的・対話的に学ぶ活動や形態を取り入れた研修デザインにより、受講者自身が授業改善に向けて「主体的・対話的で深い学びを実現するために重要なことは何か」という問いを常に持ちながら研修に取り組むことができた。

(1) わたしが考える「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた、各教科の優れた実践に含まれる要素

(2) 班別協議1での自己の授業の振り返りを参考にしながら(1)で考えた要素を分析し、下表の「導入・展開・まとめ」のどの学習段階でその要素をポイントとするか考え、今後ご自身が「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業の計画や振り返りをする際に用いる「授業チェックシート」を作成してください。

「主体的・対話的で深い学び」をめざした授業チェックシート

学習段階	チェック項目	自己評価
導入	・	<input type="checkbox"/>
展開	・	<input type="checkbox"/>
まとめ	・	<input type="checkbox"/>

(その他、大切な要素)

図8 10年経験者研修で用いた授業チェックシート

②10年経験者研修受講者の課題（「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の指導と評価）

10年経験者研修のユニット研修・検証回の「実践レポート」では、主体的・対話的で深い学びを意識して取り組んだ自身の授業実践を「生徒はどう学んだか」という視点で受講者が振り返るように、質問項目の主語を「生徒は、…」としたアンケートを実施している。（表2）

No	質問項目
1	生徒は、本時の目標を理解し、学習課題に興味をもつことができていたか
2	生徒は、学習の見通しをもつことができていたか
3	生徒は、根拠に基づいて自分の考えや課題解決に必要な情報を整理することができていたか
4	生徒は、自分の考えを「書く」「読む」「発表する」「話し合う」などの言語活動（単元あるいは、本時の目標に促したもの）に取り組むことができていたか
5	生徒は、自分の考えをもちながらペア活動やグループ活動などに取り組むことができていたか
6	生徒は、学習の振り返りでは「分かった」「できた」など、その教科等の特質に応じた学びの面白さを実感することができていたか
7	生徒は、日常生活・社会生活での実践や次の学びに意欲をもつことができていたか
8	生徒は、安心感をもって授業に参加できていたか (授業におけるルールの共有、信頼関係のある人間関係等)

表2 10年経験者研修実践レポートアンケートの質問項目

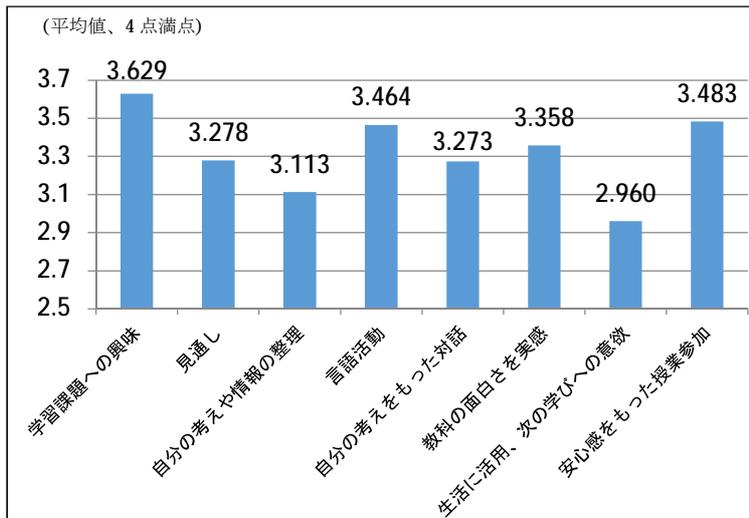


図9 10年経験者研修実践レポートアンケート

受講者は生徒の学ぶ様子から、「学習課題への興味」、「言語活動への取り組み」、「安心感をもった授業への参加」に手応えを感じているが、自分の授業実践により「生徒の日常生活や社会生活への活用につながったり、次の学びへとつながった」という項目の手応えが少ない。(図9)

この項目は「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の指導と評価関わる部分である。いずれも目標設定を明確にし、単元を積み上げて、長期的に育成していく資質・能力である。次年度の研修ではこの2つの資質・能力の育成と評価方法に重点を置いて取り組んでいく。

(2) 教科横断的な授業改善を目的とした校内研修組織の構築と組織的な校内研修の推進

① リーダー研修受講者の「目的合致度」「内容理解度」「個人活用度」「内容充実度」が上昇

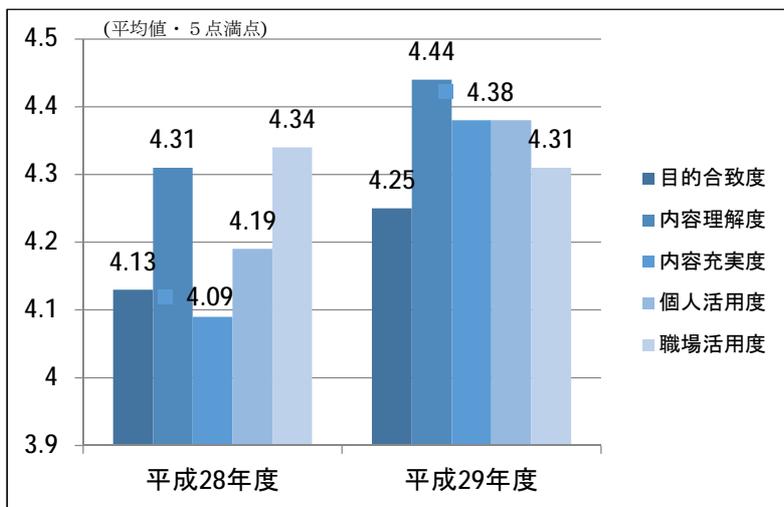


図10 リーダー研修アンケート (H28-29比較)

平成29年度のリーダー研修の中で、「動画で見る府立高校の授業」を紹介したり、平成28年度のパッケージ研修支援実施校の取り組みやリーダー研修の実践例を多く取り上げ、授業改善の方向性や校内研修の具体的な進め方を情報提供してきた。

その結果、「目的合致度」「内容理解度」「個人活用度」「内容充実度」の質問項目の数値が上昇した。

(図10)

実際、学校支援の際、校内研修の企画書や研究協議の進め方など研修で例示した方法を自校に合わせてアレンジして実施する学校が多かった。

リーダー研修のアンケート質問項目

- 受講した研修は、あなたの期待やニーズに役立っていると思いますか (目的合致度)
- 研修の内容は理解できたと思いますか (内容理解度)
- 研修の内容は充実していたと思いますか (内容充実度)
- この研修で得たことを、今後の職務に生かすことができると思いますか (個人活用度)
- この研修で得たことを、あなたの職場で報告したり、広めたりしたいと思いますか

(職場活用度)

リーダー研修のアンケートや中間報告書、成果報告書から、授業改善を推進するリーダーが抱える悩みが明らかになった。

- どうやって教員のベクトルを揃えていくか（目標の共有）
- 主体的・対話的で深い学びを実現するためのスキルの獲得
- 時間不足、多忙な現状との調整
- 日常的に公開・研究授業を行う風土づくり、授業改善に向かうマインドの醸成（組織文化）
- 学習評価、教育評価の在り方
- 予算面の課題

高等学校の多様性を考え、次年度以降も継続して校内研修の進め方に関する各校の様々な工夫を収集し、テキストや動画等にして紹介していく。また、教育センターとして、リーダーが日常的に相談し合ったり、情報共有し学び合えるようなネットワークづくりを支援する仕組みの構築が必要であると考えている。

②組織的な授業改善に取り組んだ学校の学校教育自己診断アンケートの結果上昇

平成 28 年度と平成 29 年度の学校教育自己診断結果を入手できた府立高校のうち、平成 29 年度にパッケージ研修支援に取り組んだ学校（5 校）と平成 24 年度以降にパッケージ研修支援を行ったことがない学校（5 校）を抽出し、授業に関する質問項目に対する肯定的な回答率を比較した。

(表 3)

生徒アンケート・教職員アンケートともに、パッケージ研修に取り組んだ学校の肯定的な回答率の上昇が大きい。組織的な授業改善に取り組むことで、教員一人ひとりの授業づくりへの意識の向上と協働する風土が醸成されること、これと相似形で生徒の学ぶ意欲が高まっていることが示唆される。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、教員が教科の壁を超えて組織的に授業改善を行ったとき、どのように生徒たちの成長発達につながるのか、教員や学校にどのような変容をもたらしているのか。その成果を広めることは、現在授業改善に取り組んでいる学校や教員とこれから授業改善やカリキュラム・マネジメントに取り組もうとしている学校や教員の双方のモラル（やる気）を高めることにつながると考えている。

生徒アンケートの肯定的回答率

	質問項目	授業はわかりやすい			教え方に工夫をしている先生が多い			自分の考えをまとめたり、発表したりする授業がある		
		年度	H28	H29	前年比 (H29-H28)	H28	H29	前年比 (H29-H28)	H28	H29
実施校 平成29年度 パッケージ研修支援	A校	50.3	58.0	7.7	64.5	71.5	7.0	53.6	66.0	12.4
	B校	53.5	58.2	4.7	—	—	—	—	—	—
	C校	79.1	84.6	5.5	—	—	—	—	—	—
	D校	51.9	57.5	5.6	—	—	—	51	55.2	4.2
	E校	56.9	57.6	0.7	66.3	68.7	2.4	—	—	—
	平均	58.34	63.18	4.84	65.4	70.1	4.7	52.3	60.6	8.3
	上昇率	—	—	100%	—	—	100%	—	—	100%
未実施校 平成24～29年度 パッケージ研修支援	F校	64.0	64.0	0.0	—	—	—	56.0	55.0	-1
	G校	63.8	61.3	-2.5	73.6	69.1	-4.5	65.8	75.9	10.1
	H校	46.0	42.0	-0.04	—	—	—	—	—	—
	I校	68.1	68.5	0.4	66.3	66.5	0.2	60.2	67.3	7.1
	J校	60.5	77.9	17.4	—	—	—	—	—	—
	平均	50.9	51.5	0.5	68.4	68.6	0.1	58.6	64.7	6.1
	上昇率	—	—	40%	—	—	50%	—	—	67%

教職員アンケートの肯定的回答率

	質問項目	学校の教育活動について、教職員で日常的に話し合っている			各教科において、教材の精選・工夫を行っている		
		年度	H28	H29	前年比 (H29-H28)	H28	H29
実施校 平成29年度 パッケージ研修支援	A校	77.8	77.8	0.0	72.2	88.9	16.7
	B校	83.3	84.8	1.5	87.5	89.1	1.6
	C校	—	—	—	—	—	—
	D校	75.6	77.7	2.1	77.1	80.7	3.6
	E校	71.7	63.1	-8.6	75.9	84.9	9.0
	平均	77.1	75.85	-1.25	78.175	85.9	7.725
	上昇率	—	—	50%	—	—	100%
未実施校 平成24～29年度 パッケージ研修支援	F校	72.0	65.0	-7.0	85.0	74.0	-11
	G校	77.8	75.8	-2.0	75.8	83.3	7.5
	H校	—	—	—	—	—	—
	I校	—	—	—	—	—	—
	J校	—	—	—	—	—	—
	平均	50.9	51.5	0.5	58.6	64.7	6.1
	上昇率	—	—	0%	—	—	50%

※ 上昇率は、「前年度差が+（プラス）の学校数」÷「学校数」で算出している。

※ 表中の「—」は当該校ではその質問項目が実施されていないことを示す。

※ 学校教育自己診断は、設定されたエリアの中から、各校が実情に応じて質問項目を選択して実施している。

表3 パッケージ研修支援実施校と未実施校の学校教育自己診断の結果(肯定的回答率)比較

(3) 研究成果物の作成

① 「高等学校における校内授業実践研究進め方ガイドブック」



図 11 ガイドブックのイメージ

2年間の調査研究の成果物として、「高等学校における校内授業実践研究進め方ガイドブック」を作成する。ガイドブックには、調査研究のアドバイザーである京都大学大学院 石井 英真准教授の巻頭提言『教師に求められている学びとは—教師による教師の成長のための実践研究—』のもと、主体的・対話的で深い学びの実現をめざした授業づくりのポイントとともに授業改善をテーマとした校内研修の進め方（校内体制の作り方、運営の仕方）をまとめている。（図 11、12）

今年度末には新しい高等学校学習指導要領が告示される。今後、高等学校においても主体的・対話的で深い学びの実現の視点からの授業改善や教科横断で取り組むカリキュラム・マネジメントを通じた学校改善の動きが加速することが予測される。

次年度以降はこのガイドブックを用いてパッケージ研修支援やリーダー研修を実施する。多くの学校で教員同士が学び合いとともに授業改善に挑戦していけるような同僚性と組織文化を育み、その組織力を土台として生徒の学力や学びの質を高められるように支援していきたい。

<p>巻頭提言</p> <p>京都大学大学院 教育学研究科 准教授 石井 英真</p> <p>教師に求められる学びとは —教師による教師の成長のための実践研究—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資質・能力ベースとアクティブ・ラーニングが提起していること ・日本の教師たちが追究してきた創造的な一斉授業の発展的継承 ・カリキュラム・マネジメントの先に何をめざすのか ・ビジョンの対話的共有と教師たちが対話し協働する場の組織化 ・教師同士が学び合う校内研修をデザインする視点 	<ul style="list-style-type: none"> 5 授業について <ul style="list-style-type: none"> ・単元レベルで資質・能力を見る ・単元目標へ向かう毎時の授業 ・受信 (input) —思考 (intake) —発信 (output) ・教員は聴き、待つ ・何を身に付けたかを見とる 6 効果的な研究授業の在り方 <ul style="list-style-type: none"> ・研究授業を行う目的と準備 ・授業観察の視点・ポイント・生徒の学びをみる ・研究協議の在り方 ・研究授業の総括
<p>理論編</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 なぜ、校内授業実践研究が必要なのか <ul style="list-style-type: none"> ・校内授業実践研究の充実が求められる背景 ・校内授業実践研究に求められること 2 生徒の実態をどう把握し支援するか <ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人ひとりの学びを理解する ・「めざす生徒像」に向けて取り組む教員の信念 ・生徒の力を引き出す姿勢 3 めざす生徒像の共有化（育むべき資質・能力は何か） 4 生徒を育むための指導の在り方研究 <ul style="list-style-type: none"> ・付けたい力を具現化するための取組み ・年間研修計画の設定 ・成果と課題の検証（次年度の計画策定） ・研究のまとめ 	<p>実践編</p> <ul style="list-style-type: none"> 7 府立〇〇高等学校の校内授業実践研究 <ul style="list-style-type: none"> ・年間研修計画 ・全体研修 計画・内容 ・教職員の理解を深める研究通信 ・子どもの視点に立った授業研究 8 まとめ

図 12 ガイドブックの内容（案）

②リーダー研修成果報告書

平成28年度から始めた「授業改善に関するカリキュラム・マネジメントリーダー研修」からは、校内研修を進める際にリーダーが直面する課題と、それらを解決するべく各校の実情に合わせてリーダーが所属校で行っている様々な具体的な方策を得ることができた。平成28年度(35名、35校)、平成29年度(21名、20校)の成果報告書の中から、特に他校の参考となる7～8事例を取り上げ、今年度末に当センターWebページに掲載する。

掲載事例の選出基準は次のとおりである。

- リーダーが抱える課題解決(目標が揃わない、校内研修の参加者を増やすには等)のヒントとなる
- 学校全体で育てたい生徒像を共有し、生徒の学ぶ姿から日々の授業の在り方について検討し合い、学び合う教員集団になっている(目標の明確化と協働意識の醸成のバランスがとれている)

組織的な授業改善が上手く進んでいる学校に共通する特徴をキーワードにすると、「巻き込む」「多様性」「自分事にする」である。研究チームのメンバー構成の工夫、研究通信等の発信、日常の声掛け(役割や場の設定)、学びを深める研究協議の工夫などを通じて、「教職員の協働する意識を上手く醸成」しながら、「目標の共有」を図っている。

リーダーが作成した「成果報告書」に各選出校の取組みの特徴を簡潔に解説し付してWebページに掲載する。(図13)

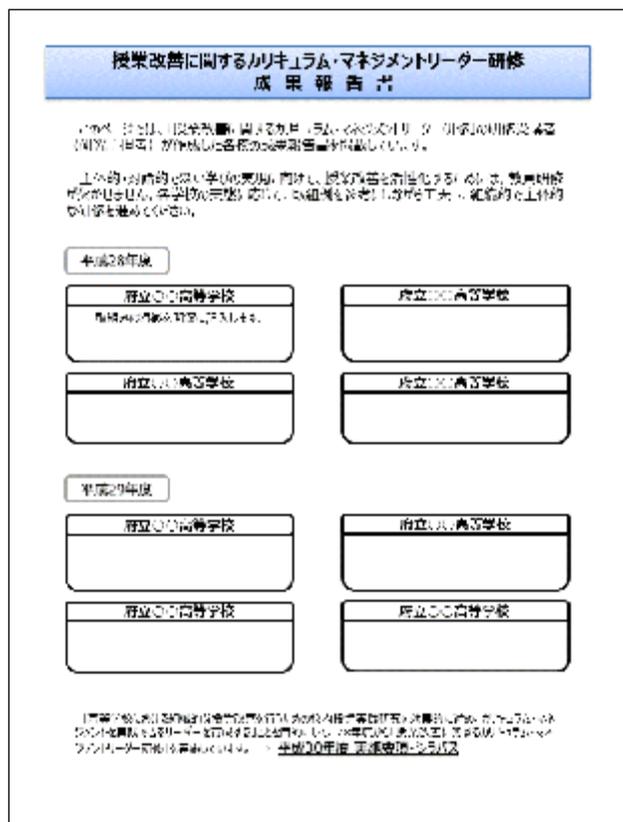
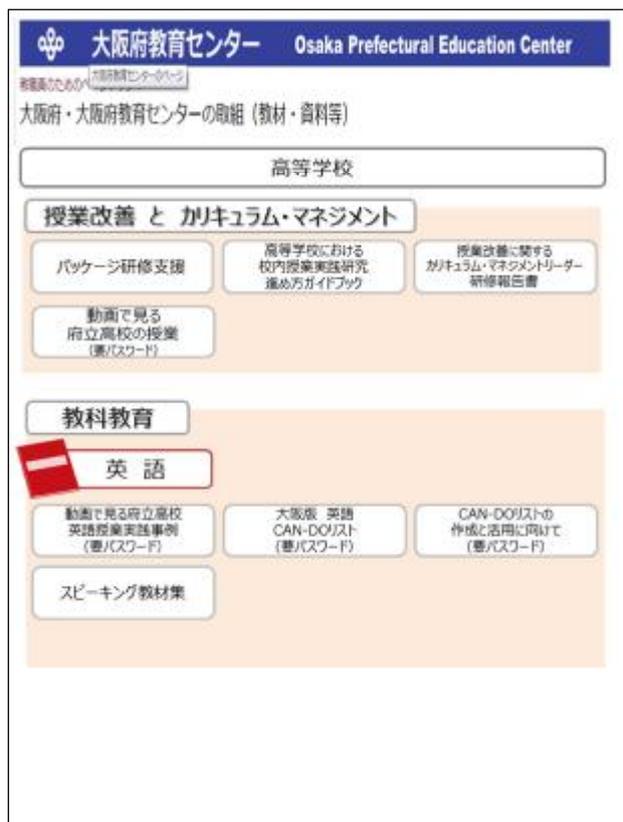


図13 Webページのイメージ

VI 今後の展望

知識詰め込み型の授業から「主体的・対話的で深い学び」、すなわちアクティブ・ラーニングへの転換が叫ばれ、本調査研究に取り組んだこの2年(平成28～29年)の間に、高等学校の様子は確実に変わりつつある。

アクティブ・ラーニングへの転換の黎明期においては、意欲の高い教師が取り組むので授業が成功する確率も高いかもしれない。しかし普及が進む今後は、失敗例が増え、かねてより危惧されている活動主義・態度主義に陥る恐れもある。失敗例が増えると、教員からのアクティブ・ラーニングへの不信感が募り、授業改善の動きが減速する心配もある。

当センターでは、京都大学大学院 石井准教授の指導のもと、一貫して何のための主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善なのかを問い、

- 授業改善が教員個人レベルのみにとどまらないこと
- カリキュラム・マネジメントを意識して、目標・指導・評価の一貫性を問い、学校教育目標の実現に向けて、教員集団がチームとして、教科の枠も超えて、協働的・組織的に授業実践研究に取り組むこと

を提起し、調査研究を進めてきた。

今回明らかになった「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善に取り組んだ教員の変化、生徒の変化、学校の変化を積極的に発信し、本調査研究の3つの成果物

- 「高等学校における校内授業実践研究進め方ガイドブック」
- 「授業改善に関するカリキュラム・マネジメントリーダー研修成果報告書」
- 「動画で見る府立高校の授業」

を活用して今後も継続して研修や学校支援を行う。本格的に動き始めた高等学校における授業改善・学校改善の動きを、一過性のものでなく持続的なものになるよう引き続き教員と学校を支援し、教員の授業力と学校の組織力を高め、生徒たちの学力や学びの質を高めていく。

(上記の成果物は、いずれも大阪府教育センターWeb ページに掲載)

平成 29 年度

高等学校におけるアクティブ・ラーニングを教育内容と関連づけた
授業の開発に関する調査研究 成果報告書

(平成 28・29 年度全国教育研究所連盟課題研究)

平成 30 年 3 月発行

大阪府教育センター カリキュラム開発部 高等学校教育推進室
大阪府大阪市住吉区苅田 4 丁目 13 番 23 号

TEL 06 (6692) 1882 (代表) FAX 06(6692)1898(代表)